

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21700733

研究課題名（和文）新学習指導要領に対応した家庭科教育の授業研究，地域性を生かした住居領域の教材開発

研究課題名（英文）A Class Teaching for Home Economics Education in the new course of study. Development of Teaching Materials in the Housing Field focusing on the characters of the Residential Areas.

研究代表者

黒光 貴峰 (KUROMITSU TAKAMINE)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：50452925

研究成果の概要（和文）

本研究の目的は、新学習指導要領に対応した教材、および教員の苦手意識が強い住居領域の教材を開発することである。研究方法としては、(1) 学習指導要領の分析、(2) 教育現場の実態把握、(3) 教材開発、(4) 開発教材の有効性の検討である。(1) については、特に住居領域を中心に学習指導要領の改訂のポイントおよび変遷についての整理を行った。(2) については、教員、生徒、教材の実態を明らかにした。(3) については、(1) (2) の結果を踏まえ、具体的な教材開発を行った。(4) については、開発した教材を使用した授業を実際の教育現場（中学校および高等学校）で実施した後、有効性の検討を行った。

研究成果の概要（英文）

In this study, we developed teaching materials in the Housing Field. And we used our new teaching materials for Home Economics education/housing in the field and evaluated its effectiveness. The usefulness of the teaching materials was evaluated in terms of the following 4 items: (1) analysis based on the curriculum, (2) in order to understand an actual situation of the education, (3) development of Teaching Materials, (4) usefulness of the teaching material was evaluated.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度			
2007年度			
2008年度			
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
総計	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：住生活

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

家庭科教育では、児童・生徒の実践的な態度の育成が重要であるため、自分たちの生活をより豊かにできる能力と技術を身につけさせる授業が求められている。授業とは、教師、児童・生徒、その媒体となる教材から構成されるものである。家庭科教育においては、各領域の指導の実情が問題とされているが、住居領域は、取り扱う対象が大きすぎるため、直接教室に取り込むことが困難であるという特有の問題を持っている。そのため、教える側の教員には苦手意識が形成され、住居領域に費やす時間が少ない状況が報告されている。また、市販されている住居領域の教材は、すぐに陳腐化してしまう、値段が高いといった実際の教育現場で使用するには困難な状況が見受けられる。

2. 研究の目的

以上のような背景を踏まえ、本研究では、家庭科教育における指導の充実を図るために、住居領域の教材開発を行うことを目的としている。

3. 研究の方法

本研究の目的を果たすために、7章編成で研究を進め論文をまとめた。第1章では、研究全体の背景、意義を明らかにするために、関連の資料および先行研究について、家庭科の指導の現状、住居領域の教材開発に関して文献調査を行った。第2章では、学校教育における教材に関する実態の把握として、アンケート調査を行った。第3章では、中学校技術・家庭科（家庭分野）の住居領域の教材開発および学習指導案の作成を行った。第4章では、第3章で開発した教材の実践および有効性の検討を行った。第5章では、第3章で開発した教材の発展的な教材の開発を行った。第6章では、第5章で開発した教材の実践および有効性の検討を行った。第7章では、結論として、各章より得られた知見から、家庭科教育における住居領域の教材開発について述べ、それらを踏まえて今後の課題と展開策を示した。

4. 研究成果

第2章の教員（39名）へのアンケート調査からは、教員が普段の授業で工夫していることは、プリントやワークシートを作成することであった。また、普段の授業で使用している教材・教具では、板書カードを使用するが最も多く、次いで、DVD・ビデオを使用するという回答もみられた。さらに、パソコンを授業に導入している教員もみられた。パソコンを使った教材の利点としては、くり返し使用できるということがあげられる。授業に役

立つ教材・教具では、住居領域の教材がほしいといった具体的な領域を示す回答がみられた他、パソコンのソフトやDVD、ビデオなど視覚的な教材がほしいという回答がみられた。特に、住居領域においては、生徒にイメージがつきにくい分、視覚的な教材が必要である。しかし、パソコン、DVDやビデオ教材は、値段が高いといった面もみられ、教育現場で普及するためには、安価な教材を考える必要がある。少数の意見であったが、体験的な活動やグループ活動を取り入れている教員もいた。家庭科の授業を行う上での不安点については、実習の安全面や技術面が最も多かった。その他に、学習指導案やワークシートなど授業の手引きや教材・教具の充実、研修の充実を求めている回答がみられた。それら解決に向けては、具体的な指導の手引きや有効な教材・教具が必要である。以上の結果から、普段使いやすい教材・教具は、プリントやワークシートであった。家庭科に関しては、住まいに関する模型や写真・資料など視覚的な教材が求められていた。さらに、教材・教具だけでなく、それらをより活用できるように、学習指導案やワークシートなど補助教材の必要性もあげられた。

第3章の中学生（303名）へのアンケート調査からは、家庭科で好きな授業形態は、「実習」72.2%が最も高く、家庭科が好きな理由としても「調理実習や被服実習が楽しいから」等の回答が多くみられた。第2章、第3章の結果を踏まえて、本研究では、住居領域の教材として、視覚的に分かりやすく、また、演習としても利用できるかるた教材の作成を行った。かるたは、題材を図案化した読札とそれに関する文字情報で成り立っており、この図と文章が一体化された教材として、その多様な実践が期待されている。また、幼児期の子どもだけではなく、学童期・思春期、大人など幅広い層にも活用でき、教材開発等も行われている。中学校の学習指導要領および教科書の分析から選出された住居領域に関するキーワードをもとに、かるたの絵札と読札を作成した。読札で使用するキーワードについては、中等学校家庭分野の教科書（東京書籍、開隆堂）の分析を行った。その結果、37種のキーワードを抽出し、読札と絵札の作成を行った。

次に、プレ授業とヒアリング調査を行い、教育現場での導入の方向性を検討した。プレ授業では、①所要時間と様子、②教材の使いやすさと改善点、③開発した教材を実施した印象を検討した。①については、所要時間は実施中の会話を含め10分程度であった。プレ授業の対象者は大学生であることを考慮し、中学校で実施する場合は15分程度の所要時間が必要であると考えられる。②につい

ては、開発した教材を実際に使用してみて、読み手から、読み札の行間・改行などを工夫すると読み札が読みやすくなるという意見が出た。また、取り手からは、教材を何度も使用していくなかで教材の色落ちや痛みがありえるという紙質の問題を指摘があった。紙の大きさ、文字やイラストの大きさ、色に対してはちょうど良いという意見があった。以上を踏まえ改善点として挙げられたことは、読み札の行間と改行、紙質である。読み札の行間と改行に関しては、すぐに改善を行った。紙質に関しては、教材として教員が印刷しやすい紙質であることや、イラストの色や大きさを考え、プレ授業と同じものを使用することとし、ラミネート加工などの対策を提示することにした。③については、かるたを使用して、思った以上に楽しく活動が行えたという反応であった。また、イラストやキーワードばかりに気を配るのではなく、実際に言われている内容を頭で考え札を探すことができ、学習としてのかるたの有効性がみられたという意見をいただいた。実施にいたって、読み手が読み札の読み方を変えることでかるたの活動が一層充実したものになるという意見を得た。読み方の例としては、キーワードをあえて読まずに読み札を読む、強弱やスピードを変えて読み札を読む、同じような内容の読み札を連続して読む、などが挙げられた。

ヒアリング調査は、中学校および高等学校の家庭科教員を対象に、①開発した教材の印象、②教材の使いやすさ、③実践するための課題の検討を行った。①については、非常に良い印象が得られた。「実際に住居領域の教材として導入できるのではないかと」意見が得られた。また、教材そのものに様々な可能性があり、教員の指導目的によって活用の仕方にも幅ができるという意見が得られた。②については、かるたという教材については、「実習形式で行うことが可能であり、楽しみながら学習できる良い教材である」という意見が得られた。また、「この教材を参考にし、教員が新しいカードを作成することにより発展性の高い教材である」と意見も得られた。③については、課題としては、「具体的な指導案の作成、演習にかかる時間、演習時の人数、カードの大きさ・紙質などをさらに検討していく必要がある」と意見が得られた。

プレ授業およびヒアリング調査より、総合的に非常に高い評価を得た。「ぜひ、使用したい」という回答もあり、課題等を改善することで十分授業で使用できる教材であることが予想される。



図1. 開発教材の一部（絵札）



図2. 開発教材の一部（読札）

第4章では、第3章で開発した教材を実際に授業で実践し、その妥当性・有効性について検証を行った。具体的な教育現場としては、中学校および高等学校で実践した。中学校については、開発教材が中学校で有効に活用できるのかを検討することが目的であり、高等学校については、同様の教材が高等学校でも活用できるのかを検討することが目的である。開発教材の妥当性と有効性を検証するための関連データ採取は、1) 家庭科教育の関係者へのヒアリング調査、2) 演習に対する演習対象者の反応、の2つの視点から行った。ヒアリング調査は、鹿児島県教育庁義務教育課指導主事、鹿児島県総合教育センター教職研修課研究主事、鹿児島県教育委員会学校教育課指導主事に行い、「新学習指導要領へ対応した教材である」という評価と、「全体の指導計画とワークシートを作成して欲しい」という要望があげられた。演習対象者の反応からは、中学校の授業実践では、住居領域の授業を終えたあとの復習授業としてかるた教材を導入した。かるた1回の演習の所要時間は10～11分が最も多く、授業時間内に十分に収まることが確認できた。また、調査対象の約8割が「授業が面白かった」、9割以上が「住生活の内容を振り返ることが出来た」と回答していた。また、感想でも「遊び感覚で楽しく復習できた」「かるたは楽しかった」「いつもの授業と違って楽しかった」などがあり、生徒は楽しく学ぶことができたといえる。高等学校では、かるたの授業を通して、生徒は、「当たり前のように家に住んでいたけど、いろいろな役割があると知った」「かるたを使って楽しく住まいについて知ることができた」「遊び感覚のものから学習に触れていくのはとてもいい方法だ」「聞き覚えのある語句や、聞いたことのない語句を学び、これからの授業でもっと深く学びたい」など感想がみられ、当教材によって、住居領域に興味を持った生徒もみられた。

第5章では、第3章で開発した教材の発展を行った。具体的には、①中学校版かるたの修正と②高等学校版かるたの作成、③開発教材の活用法の開発である。①については、第3章の結果をもとに、読札の「見やすさ」、「読みやすさ」、「キーワードの明確化」、絵札のイラストの「見やすさ」、「表現」の改善を行った。また、かるたの大きさも名刺サイズと同じにし、切り込み等が入っている市販のマルチカード用紙と対応しており、市販のマルチカードを購入すれば、切り込みにあわせた印刷が可能で、裁断などの手間も省けるようになっている。

②については、中学校版かるたと同様のプロセスをとり行った。高等学校の学習指導要領および教科書を分析して、住居領域に関する新たに24のキーワードを抽出し、そのキ

ーワードをもとにかるたの絵札と読札を作成した。教科書分析に使用した教科書は、教育図書「新家庭総合 ともに生きる くらしをつくる」、開隆堂「家庭総合 明日の生活を築く」、教育図書「家庭総合」、大修館書店「新家庭総合 生活の創造をめざして」、第一学習社「家庭総合 生活に豊かさを求めて」、東京書籍「家庭総合 自立・共生・創造」、実教出版「新家庭総合 21」の計7冊である。

③については、(1) かるた遊び、(2) 板書カードやワークシートとしての利用、(3) オリジナルカードの作成、が考えられる。(1) では、住居領域の全体の学習を把握させる「導入時」での活用と、住居領域を振り替えさせる「復習時」での活用が考えられる。(2) では、板書用に大きなサイズで印刷したかるたを板書カードとして使用する、ワークシートのイラストにかるたの絵のデータを利用する等が考えられる。(3) については、かるたはデータ媒体になっているため、簡単に印刷して使用することが可能である。また、読札を変更したり、生徒の実態や地域の実態に応じて、新しいカードを作成したりすることも考えられる。

第6章では、第5章で作成したかるた教材の有効性の検討を行った。調査方法は、第4章と同様、実際の教育現場（中学校および高等学校）で開発したかるた教材を使用した授業を実施し、その後、アンケート調査を行った。調査時期は、中学校、高等学校ともに2010年12月である。授業実施については、授業計画の導入時とまとめ時の2つの指導案での検討を行った。また、あわせて鹿児島県教育センター家庭科研究主事、鹿児島市立中学校家庭科教諭へのヒアリング調査を行った。ヒアリング調査の時期は、2010年12月、調査の内容は、住居領域の指導の現状について、望ましい教材について、かるた教材について明らかにすることである。

中学校（中学生194名）で実践した結果、所要時間は、導入時（74名）では、平均12.31分、まとめ時（115名）では平均14.67分であった。かるたを使った授業については、導入時、「おもしろかった」78.9%、まとめ時、「おもしろかった」80.2%であった。かるたを使った授業を通して住生活の内容を理解することが出来たかについては、導入時「理解できた」87.5%、まとめ時「理解できた」99.1%であった。かるたを行っている際の教員の助言の有無を尋ねたところ、導入時「助言あり」4.1%、まとめ時「助言あり」6.1%であった。授業の難易度については、導入時「難しかった」22.1%、まとめ時「難しかった」23.0%であった。かるたを使った授業を通して住生活の内容を理解することが出来たかおよび授業の難易度については、導入時とま

とめ時において、1%水準で有意な差がみられた。感想では、「遊びながら楽しく復習することができた」、「絵や文章が分かりやすく住居の内容が頭に入った」、「今までにない授業で楽しく学習することができた」、「グループで活動し、楽しく学ぶことができた」といった回答がみられた。



写真 1. 開発教材実施の様子①



写真 2. 開発教材実施の様子②



写真 3. 開発教材実施の様子③

高等学校（高校生 30 名）で実践した結果、中学校の内容の振り返りについては、導入時（29 名）「振り返ることが出来た」73.3%、かるたを用いた授業手法については、導入時「面白かった」36.7%、まとめ時「面白かった」75.9%であった。授業の難易度については、導入時「難しかった」3.3%、まとめ時「難しかった」3.4%、導入時「かるたを用いた授業住居の領域に興味を持てた」83.3%であった。感想では、「楽しく学習できた」、「グループで盛り上がった」、「楽しく復習できた」、

「分かりやすかった」などの回答が得られた。ヒアリング調査からは、住居領域の指導の現状については、「他の領域に比べて教材の量が少なく実習・実験がしにくい」、「授業時間数の確保も難しい」という回答が得られた。住居領域の教材開発については、「住居領域の教材を大学が開発してくれることは、教育現場にも大いに役に立つことであり今後も積極的に行ってほしい」という回答であった。望ましい教材としては、「住居領域はイメージすることが難しいため、生徒が視覚的に理解できる教材が望ましい」という回答が得られた。また、「研究会等への参加が難しいため、教材を簡単に入手できる方法も考えてほしい」という回答もみられた。かるたという授業手法については、「昔ながらの遊びを取り入れた手法であり、生徒も身近に楽しんで活動ができる」という回答が得られた。また、「かるたとしての使用だけではなく、板書カードや家庭科室の設管用のカードとしての使用は、大変、有効的である」、「発展が期待できる教材」という回答が得られた。教材開発に必要とされる条件としては、「開発されていない」、「教材の経済性」、「教材の扱いやすさ」、「フレキシビリティ」、「教育効果」、などがあげられる。第 7 章では、当教材の特徴を、教材開発に要求される条件と対応させて示した。「従来、開発されていない」点については、住居という領域、実習を取り入れたという手法からみても、先進的な教材といえる。「教材の経済性」については、市販されている住居領域の教材と比べ、低価格である。必要な消耗品としては、印刷用紙・インク等であり、現在の学校教育のコンピュータ環境でも十分可能である。使用する際は、必要なものを必要な分だけ印刷することもでき、無駄がなく経済的である。また、紙の材質を工夫したりやラミネート加工したりすることで繰り返し使用することができる。「教材の扱いやすさ」については、①簡単な演習方法、②教室への持ち運び、③教材の重量、④出し入れの簡単さ、⑤手入れの簡単さ等が基準にあげられる。①は、基本的な操作手法は、昔ながらの遊びを取り入れた手法で、ほとんどの生徒が体験したことがあるものである。また、体験していなくてもルールが簡単で、すぐに対応することが出来る。②、③は、大きさも読札・絵札ともに名刺サイズで紙媒体であるため、簡単に持ち運ぶことができ、教室内でグループ活動も行える。また、当教材はパソコンで作成している。そのため、データとして簡単に持ち運びをすることができるだけでなく、eメールによる送信、受信の対応も可能である。④、⑤、および「状況に対応できるフレキシビリティ」については、課題の設定を変更することによって、時

代や教育段階にあわせて難易度を変更することができる。また、絵札は、かるたとしての利用方法だけではなく、板書カードやワークシート、教室の設営用のカード等様々な活用方法が考えられる。読札は、クイズ形式といった読み方を工夫するなど幅広く活用できる。そして、教員が生徒の実態や地域の実態に応じて、独自のカードを作成することができ、柔軟に発展することができる。今後は、地域性を生かしたかるたの作成、また、ホームページなどICTの活用といった発展も考えられる。

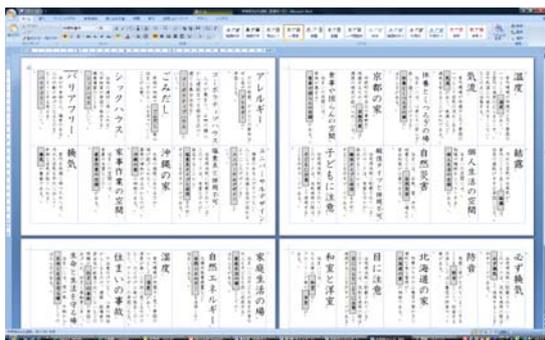


図3. データ上の開発教材

「教育効果」については、イラストやキーワードで住居領域の学習を理解することができるため、生徒の興味・関心は高い。また、学習の導入や復習段階に取り入れることで、住居領域の内容の定着にもつながる。新学習指導要領では、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うため、言語活動の充実することとしている。国語科で培った能力を基本に、それぞれの教科等の目標を実現する手立てとして、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤といった言語の役割を踏まえて、言語活動を充実させる必要がある。そのため、授業の中で児童・生徒が言語活動を積極的に行う場面を充実する必要があり、開発された教材は、その点からみても有効であるといえる。

以上、家庭科教育における住居領域の指導を充実させるために、教材開発を行い有効性の検討を行ってきたが、中学生、高校生にも抵抗なく受け入れられることが確認できた。実習を取り入れた授業は、生徒の興味、関心が高く、この種の授業を増やして欲しいと感じている者が多かった。今後は、地域性を取り入れた絵札・読札の作成や、簡単に教材を入手できるようなシステムの構築を行い、住居領域の充実に向けていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

① 黒光貴峰, 新馬場有希, 徳重礼美, 鹿児島県における家庭科教育の実施状況－中学校家庭科教員の実態－, 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 査読無し, Vol.62, (2011)

〔学会発表〕（計4件）

① 新馬場有希, 黒光貴峰, 鹿児島県における家庭科教育の実施状況その2－中学校家庭科教員の配置状況と課題－, 日本家庭科教育学会九州地区会第14回研究発表会, 2010年7月25日(福岡県宗像市)

② 黒光貴峰, 大学生における小・中・高等学校家庭科の学習実態と家庭科に対する意識, 日本家庭科教育学会, 2010年7月3日(京都府京都市)

③ 新馬場有希, 中村一絵, 黒光貴峰, 鹿児島県における家庭科教育の実施状況－中学校家庭科教員の実態－, 日本家庭科教育学会九州地区会第13回研究発表会, 2009年7月25日(宮崎県宮崎市)

④ 中村一絵, 新馬場有希, 黒光貴峰, 鹿児島県の地域性を生かした住居領域の教材開発, 日本家庭科教育学会九州地区会第13回研究発表会, 2009年7月25日(宮崎県宮崎市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒光 貴峰 (KUROMITSU TAKAMINE)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：50452925

(2) 研究協力者

新馬場有希, 徳重礼美, 中村一絵